

# 源氏物語

蜩

紫式部

青空文庫



身にしみて物を思へと夏の夜の螢ほの

かに青引きてとぶ

(晶子)

源氏の現在の地位はきわめて重いがもう廷臣としての繁忙もこ  
こまでは押し寄せて来ず、のどかな余裕のある生活ができるので  
あつたから、源氏を信頼して来た恋人たちにもそれぞれ安定を与  
えることができた。しかも対たいの姫君だけは予期せぬ煩悶はんもんをする  
身になっていた。大夫たゆうの監げんの恐ろしい懸想けそうとはいっしよにならぬ  
にもせよ、だれも想像することのない苦しみが加えられているの  
であつたから、源氏に持つ反感は大きかった。母君さえ死んでい

なかつたならと、またこの悲しみを新たにすることになつたのであつた。源氏も打ち明けてからはいつそう恋しさに苦しんでいるのであるが、人目をはばかりてまたこのことには触れない。ただ堪えがたい心だけを慰めるためによく出かけて来たが、玉たまかざら鬢のそばに女房などのあまりいない時にだけは、はつと思わせられるようなことも源氏は言つた。あらわに退けて言うこともできないことであつたから玉鬢はただ氣のつかぬふうをするだけであつた。人柄が明るい朗らかな玉鬢であつたから、自分自身ではまじめ一方な氣なのであるが、それでもこぼれるような愛あいきよう嬌けうが何にも出てくるのを、兵部卿ひょうぶきょうの宮などはお知りになつて、夢中なほどに恋をしておいでになつた。まだたいして長い月日がたつ

たわけではないが、確答も得ないうちに不結婚月の五月にさえなつたと恨んでおいでになつて、

ただもう少し近くへ伺うことをお許しくだすつたら、その機会に私の思い悩んでいる心を直接お洩もらしして、それによつてせめて慰みたいと思います。

こんなことをお書きになつた手紙を源氏は読んで、

「そうすればいいでしょう。宮のような風流男のする恋は、近づかせてみるだけの価値はあるでしょう。絶対にいけないなどは言わないほうがよい。お返事を時々おあげなさいよ」

と源氏は言つて文章をこう書けとも教えるのであつたが、何重にも重なる不快というようなものを感じて、気分が悪いから書か

れないと玉鬘は言った。こちらの女房には貴族出の優秀なような者もあまりないのである。ただ母君の叔父おじの宰相の役を勤めていた人の娘で、れいり伶俐な女が不幸な境遇にいたのを捜し出して迎えた宰相の君というのは、字などもきれいに書き、落ち着いた後見役も勤められる人であつたから、玉鬘が時々やむをえぬ男の手紙に返しをする代筆をさせていた。その人を源氏は呼んで、口授して宮へのお返事を書かせた。聞いていて玉鬘が何と言うかを源氏は聞きたかつたのである。姫君は源氏に恋をささやかれた時から、兵部卿の宮などの情をこめてお送りになる手紙などを、少し興味を持つてながめることがあつた。心がそのほうへ動いて行くというのではなしに、源氏の恋からのがれるためには、兵部卿の宮に好

意を持つふうを装うのも一つの方法であると思うのである。この人にも技巧的な考えが出るものである。

源氏自身がおもしろがって宮をお呼び寄せしようとしているとは知らずに、思いがけず訪問を許すという返事をお得になった宮は、お喜びになつて目だたぬふうで訪ねておいでになつた。妻戸の室に敷き物を設けて几帳きちようだけの隔てで会話がなさるべくできていた。心憎いほどの空薫そらだきをさせたり、姫君の座をつくらつたりする源氏は、親でなく、よこしまな恋を持つ男であつて、しかも玉鬘たまかざらの心にとっては同情される点のある人であつた。宰相の君なども会話の取り次ぎをするのが晴れがましくてできそうな気もせず隠れているのを源氏は無言で引き出したりした。

夕ゆうやみ闇時やみときが過ぎて、暗く曇つた空を後ろにして、しめやかな感じふうさいのする風采の宮がすわつておいでになるのも艶えんであつた。奥の室から吹き通う薰たきもの香の香に源氏の衣服から散る香も混じつて宮のおいでになるあたりは匂においに満ちていた。予期した以上の高こ華うげな趣の添つた女性らしくまず宮はお思ひになつたのであつた。宮のお語りになることは、じみな落ち着いた御希望であつて、情熱ばかりを見せようとあそばすものでもないのが優美に感ぜられた。源氏は興味をもつてこちらで聞いているのである。姫君は東の室に引き込んで横になつていたが、宰相の君が宮のお言葉を持つてそのほうへはいつて行く時に源氏は言ことつてた。

「あまりに重苦しいしかたです。すべて相手次第で態度を変える



ことが必要で、そして無難です。少女らしく恥ずかしがっている年齢としでもない。この宮さんなどに人づてのお話などをなさるべきでない。声はお惜しみになつても少しは近い所へ出ていないではいけませんよ」

などと言う忠告である。玉鬘は困っていた。なおこうしていればその用があるふうをしてそばへ寄つて来ないとは保証されない源氏であつたから、複雑な侘わびしさを感じながら玉鬘はそこを出て中央の室の几帳きちょうのところへ、よりかかるような形で身を横たえた。宮の長いお言葉に対して返辞がしにくい気がして玉鬘が躊躇ちゅうしている時、源氏はそばへ来て薄物の几帳たの垂れを一枚だけ上へ上げたかと思うと、蠟ろうの燭ひをだれかが差し出したかと思うよ

うな光があたりを照らした。玉鬘は驚いていた。夕方から用意してほたる薄うすよう様の紙へたくさん包ませておいて、今まで隠していたのを、さりげなしに几帳を引き繕うふうをしてにわかそでに袖から出したのである。たちまちに異常な光がかたわらに湧わいた驚きに扇で顔を隠す玉鬘の姿が美しかった。強い明りがさしたならば宮も中をおのぞきになるであろう、ただ自分の娘であるから美貌びぼうであろうと想像をしておいでになるだけで、実質のこれほどすぐれた人とも認識しておいでにならないであろう。好色なお心を遣やる瀬ないものにして見せようと源氏が計ったことである。実子の姫君であったならこんな物狂わしい計らいはしないであろうと思われる。源氏はそつとそのまま外の戸口から出て帰ってしまった。宮

は最初姫君のいる所はその辺であろうと見当をおつけになつたのが、予期したよりも近い所であつたから、興奮をあそばしながら薄物の几帳の間から中をのぞいておいでになつた時に、一室ほど離れた所に思いがけない光が湧いたのでおもしろくお思ひになつた。まもなく明りは薄れてしまつたが、しかも瞬間のほのかな光は恋の遊戯にふさわしい効果があつた。かすかによりは見えなかつたが、やや大柄な姫君の美しかった姿に宮のお心は十分に惹ひかれて源氏の策は成功したわけである。

「鳴く声も聞こえぬ虫の思ひだに人の消けつには消けゆるものかは

「御実験なすつたでしよう」

と宮はお言いになった。こんな場合の返歌を長く考え込んでか  
らするのは感じのよいものでないと思つて、玉鬘たまかざらはすぐに、

声はせで身をのみこがす螢こそ言ふよりまさる思ひなるらめ

とはかないふうに言つただけで、また奥のほうへはいつてしま  
つた。宮は疎々うとうとしい待遇を受けるといふような恨みを述べてお

いになった。あまり好色らしく思わせたくなくと宮は朝までは  
おいでにならずに、軒の雫しずくの冷たくかかるのに濡ぬれて、暗いうち  
にお帰りになった。杜ほととぎす 鶉ほととぎすなどはきつと鳴いたであらうと思わ

れる。筆者はそこまで穿鑿せんさくはしなかつた。

宮の御風采ふうさいの艶えんな所が源氏によく似ておいでになると言つて女房たちは賞ほめていた。昨夜ゆうべの源氏が母親のような行き届いた世話をした点で玉鬘くもんの苦悶くもんなどは知らぬ女房たちが感激していた。玉鬘は源氏に持たれる恋心を自身の薄倖はつこうの現われであると思つた。実の父に娘を認められた上では、これほどの熱情を持つ源氏を良人おつとにすることが似合わしくないことでないかもしれない。現在では父になり娘になつているのであるから、両者の恋愛がどれほど世間の問題にされることであろうと玉鬘は心を苦しめているのである。しかし眞実は源氏もそんな醜い關係にまで進ませようとは思つていなかつた。ただ恋を覚えやすい性格であつたから、中

宮などに対しても清い父親としてだけの愛以上のものをいだいていないのではない、何かの機会にはお心を動かそうとしながらも高貴な御身分にはばかられてあらわな恋ができないだけである。玉鬘は性格にも親しみやすい点があつて、はなやかな気分のあふれ出るようなのを見ると、おさえている心がおどり出して、人が見れば怪しく思うほどのことも混じつていくのであるが、さすがに反省をして美しい愛だけでこの人を思おうとしていた。

五日には馬場殿へ出るついでにまた玉鬘を源氏は訪ねた。たず

「どうでしたか。宮はずっとおそくまでおいでになりましたか。際限なく宮を接近おさせしないようにしましょう。危険性のある方だからね。力で恋人を征服しようとしなない人は少ないからね」

などと宮のことも活かせも殺しもしながら訓戒めいたことを言  
 つている源氏は、いつもそうであるが、若々しく美しかった。色  
 も光沢つやもきれいな服の上に薄物の直衣のうしをありなしに重ねているの  
 なども、源氏が着ていると人間の手で染め織りされたものとは見  
 えない。物思いがなかつたなら、源氏の美は目をよろこばせるこ  
 とであろうと玉鬢うすようは思った。兵部卿ひょうぶきょうの宮からお手紙が来た。  
 白い薄うす様によい字が書いてある。見て美しいが筆者が書いてし  
 まえばただそれだけになることである。

今日けふさへや引く人もなき水隠みれに生おふるあやめのねのみ泣か  
 れん

長さが記録になるほどの菖蒲しょうぶの根に結びつけられて来たのである。

「ぜひ今日はお返事をなさい」

などと勧めておいて源氏は行ってしまった。女房たちもぜひと  
言うので玉鬘自身もどういうわけもなく書く気になっていた。

あらはれていとど浅くも見ゆるかなあやめもわかず泣かれけ  
るねの

おとめ  
少女らしく。



とだけほのかに書かれたらしい。字にもう少し重厚な気が添えたいと芸術家的な好みを持っておいでになる宮はお思いになったようであつた。

今日は美しく作つたくすたま薬玉などが諸方面から贈られて来る。不幸だつたところと今とがこんなことにも比較されて考えられるたまか玉鬘ずらは、この上できるならば世間の悪名を負わずに済ませたいともつともなことを願つていた。

源氏ははなちるさと花散里夫人の所へも寄つた。

「中将が左近衛府の勝負のあとで役所の者を皆つれて来ると言つてましたからその用意をしておくのですね。まだ明るいうちに來るでしょう。私は何も麗々しく扱おうと思つていなかつた姫君の

ことを、若い親王がたなどもお聞きになつて手紙などをよくよこしておいでになるのだから、今日はいい機会のように思つて、東の御殿へ何人も出ておいでになることになるでしょうから、そんなつもりで仕度したくをさせておいでください」

などと夫人に言つていた。馬場殿はこちらの廊からながめるのに遠くはなかつた。

「若い人たちは渡わた殿どのの戸をあけて見物するがよい。このごろの左近衛府にはりつぱな下士官がいて、ちよつとした殿上役人などは及ばない者がいますよ」

と源氏が言うのを聞いていて、女房たちは今日の競技を見物のできることを喜んだ。玉鬘のほうからも童女などが見物に来てい

て、廊の戸に御簾が青やかに懸け渡され、はなやかな紫ぼかしの  
 几帳きちようがずつと立てられた所を、童女や下仕えの女房が行き来し  
 ていた。菖蒲しょうぶ重ねあこめの袖、薄藍うすあい色の上着を着たのが西の対の童  
 女であった。上品に物馴れたのが四人来ていた。下仕えは袴おうちの花  
 の色のぼかしの裳もに撫なで子色の服、若葉色の唐衣からぎぬなどを装うて  
 いた。こちらの童女は濃こむらさき紫に撫子重ねの汗衫かぎみなどでおおよ  
 うな好みである。双方とも相手に譲るものでないというふうに氣ど  
 っているのがおもしろく見えた。若い殿上役人などは見物席のほ  
 うに心の惹ひかれるふうを見せていた。午後二時に源氏は馬場殿へ  
 出たのである。予想したとおりに親王がたもおおぜい来ておいで  
 になった。左右の組み合わせなどに宮中の定例の競技と違って、

中少将が皆はいつて、こうした私の催しにかえつて興味のあるものが見られるのであつた。女にはどうして勝負が決まるのかも知らぬことであつたが、舎人<sup>とねり</sup>までが艶<sup>えん</sup>な装束をして一所懸命に競技に走りまわるのを見るのはおもしろかつた。南御殿の横まで端は及んでいたから、紫夫人のほうでも若い女房などは見物していた。「打毬<sup>だきゆうらく</sup>楽」<sup>なそり</sup>「納蘇利」などの奏楽がある上に、右も左も勝つたびに歓呼に代えて楽声をあげた。夜になつて終わるころにはもう何もよく見えなかつた。左近衛府<sup>さこんえふ</sup>の舎人<sup>とねり</sup>たちへは等差をつけていろいろな纏<sup>てんとう</sup>頭<sup>とう</sup>が出された。ずっと深更になつてから来賓は退散したのである。源氏は花散里のほうに泊まるのであつた。いろいろな話が夫人とかわされた。

「兵部卿の宮はだれよりもごりっぱなようだ。御容貌などはよろしくないが、身の取りなしなどに高雅さと愛嬌あいきようのある方だ。

そのほかはよいと言われている人たちにも欠点がいりある」

「あなたの弟様でもあの方のほうが老ふけてお見えになりますね。

こちらへ古くからよくおいでになると聞いていましたが、私はず

つと昔に御所で隙見すきみをしてお知り申し上げているだけですから、

今日きょうお顔を見て、そのころよりきれいにおなりになったと思いま

した。帥そうの宮様はお美しいようでも品がおよろしくなくて王様と

いうくらいにしかお見えになりませんでした」

この批評の当たっていることを源氏は思ったが、ただ微笑ほほえんで

いただけであった。花散里夫人の批評は他の人たちにも及んだの

であるが、よいとも悪いとも自身の意見を源氏は加えようとしな  
いのである。難をつけられる人とか、悪く見られている人とかに  
同情する癖があつたから。右大将のことを深味のあるような人で  
あると夫人が言うのを聞いても、たいしたことがあるものでない、  
婿などにしては満足していられないであろうと源氏は否定したく  
思つたが、表へその心持ちを現わそうとしなかつた。睦むつまじくし  
ながら夫人と源氏は別な寢床に眠るのであつた。いつからこうな  
つてしまったのかと源氏は苦しい気がした。平生花散里夫人は、  
源氏に無視されていると腹をたてるようなこともないが、六条院  
にはなやかな催しがあつても、人づてに話を聞くぐらいで済んで  
いるのを、今日は自身の所で会があつたことで、非常な光榮にあ

ったように思っているのであつた。

その駒こまもすさめぬものと名に立てる汀みぎはの菖蒲あやめ今日や引きつる

とおおように夫人は言った。何でもない歌であるが、源氏は身にしむ気がした。

にほ鳥に影を並ぶる若駒はいつか菖蒲あやめに引き別るべき

と源氏は言った。意はそれでよいが夫人の謙遜けんそんをそのまま肯定した言葉は少し気の毒である。

「二六時中あなたといつしよにいるのではないが、こうして信賴をし合つて暮らすのはいいことですね」

戯れを言うのでもこの人に対してはまじめな調子にされてしまふ源氏であつた。帳台の中の床を源氏に譲つて、夫人は几帳きちょうを隔てた所で寝た。夫婦としての交渉などはもはや不似合いになつたとしてゐる人であつたから、源氏もしいてその心を破ることをしなかつた。

梅雨つゆが例年よりも長く続いていつ晴れるとも思われないうころの退屈さに六条院の人たちも絵や小説を写すのに没頭した。明石夫あかし人はそんなほうの才もあつたから写し上げた草紙などを姫君へ贈つた。若い玉たま鬢かざらはまして興味を小説に持つて、毎日写しもし、



読みもすることに時を費やしていた。こうしたことの相手を勤めるのに適した若い女房が何人もいたのであった。数奇な女の運命がいろいろと書かれてある小説の中にも、事実かどうかは別として、自身の体験したほどの変わったことにあつてゐる人はないと玉鬘は思った。住吉すみよしの姫君がまだ運命に恵まれていたころは言うまでもないが、あとにもなお尊敬されているはずの身分でありながら、今一步で卑しい主計頭かづえのかみの妻にされてしまう所などを読んでは、恐ろしかった監げんのことが思われた。源氏はどこの御殿にも近ごろは小説類が引き散らされているのを見て玉鬘に言った。

「いやなことですね。女というものはうるさがらずに人からたまされるために生まれたものなんですね。ほんとうの語られている

ところは少ししかないのだろうが、それを承知で夢中になって作中へ同化させられるばかりに、この暑い五月雨さみだれの日に、髪の乱れるのも知らずに書き写しをするのですね」

笑いながらまた、

「けれどもそうした昔の話を讀んだりすることがなければ退屈は紛れないだろうね。この嘘うそごとの中にほんとうのことらしく書かれてあるところを見ては、小説であると知りながら興奮をさせられますね。可憐かれんな姫君が物思いをしているところなどを讀むとちよつと身にしむ気もするものですよ。また不自然な誇張がしてあると思ひながらつり込まれてしまうこともあるし、またまづい文章だと思ひながらおもしろさがある個所にあることを否定できな

いようなものもあるようです。このごろあちらの子供が女房などに時々読ませているのを横で聞いていると、多弁な人間があるものだ、嘘を上手じょうずに言い馴なれた者が作るのだという気がしますが、そうじゃありませんか」

と言うと、

「そうでございますね。嘘を言い馴れた人がいろんな想像をして書くものでございましょうが、けれど、どうしてもほんとうにか思われないのでございませすよ」

こう言いながら玉たま鬢かづらは硯すずりを前へ押しやった。

「不風流に小説の悪口を言ってしまったね。神代以来この世であったことが、日本紀にほんぎなどはその一部分に過ぎなくて、小説の

ほうに正確な歴史が残っているものでしょう」

と源氏は言うのであった。

「だれの伝記とあらわに言つてなくても、善よいこと、悪いことを目撃した人が、見ても見飽かぬ美しいことや、一人が聞いているだけでは憎み足りないことを後世に伝えたいと、ある場合、場合のことを一人でだけ思つていられなくなつて小説というものが書き始められたのだろう。よいことを言おうとすればあくまで誇張してよいことづくめのことを書くし、また一方を引き立てるためには一方のことを極端に悪いことづくめに書く。全然架空のことではなくて、人間のだれにもある美点と欠点が盛られているものが小説であると見ればよいかもしれない。支那しなの文学者が書いた

ものはまた違ふし、日本のも昔できたものと近ごろの小説とは相異していることがあるでしょう。深さ浅さはあるだろうが、それを皆嘘であると断言することはできない。仏が正しい御心みこころで説いてお置きになった経の中にも方便ということがあつて、大悟しない人間はそれを見ると疑問が生じるだろうと思われる。方等ほうとう経きようの中などにはことに方便が多く用いられています。結局は皆同じことになつて、菩提心ぼだいはよくて、煩惱ぼんのうは悪いということが言われてあるのです。つまり小説の中に善悪を書いてあるのがそれにあたるのですよ。だから好意的に言えば小説だつて何だつて皆結構なものだということになる」

と源氏は言つて、小説が世の中に存在するのを許したわけであ

る。

「それにしてもね、古いことの書いてある小説の中に私ほどまじめな愚直過ぎる男の書いてあるものがありますか。それからまた人間離れのしたような小説の姫君だってあなたのように恋する男へ冷淡で、知って知らぬ顔をするようなのはないでしょう。だからありふれた小説の型を破った小説にあなたと私のことをさせましょう」

近々と寄つて来て源氏は たまかづら 玉鬢 にこうささやくのであった。玉鬢は襟えりの中へ顔を引き入れるようにして言う。

「小説におさせにならないでも、こんな奇怪なことは話になつて世間へ広まります」

「珍しいことだといふのですか。そうです。私の心は珍しいこと  
にときめく」

ひたひたと寄り添ってこんな戯れを源氏は言うのである。

「思ひ余り昔のあとを尋ぬれど親にそむける子ぞ類たぐひなき

不孝は仏の道でも非常に悪いことにして説かれています」

と源氏が言っても、玉鬘は顔を上げようともしなかつた。源氏は女の髪をなでながら恨み言を言った。やつと玉鬘は、

古き跡を尋ぬれどげになかりけりこの世にかかる親の心は

こう言った。源氏は氣恥ずかしい気がしてそれ以上の手出しはできなかつた。どうこの二人はなつていくのであろう。

紫夫人も姫君に託してやはり物語を集める一人であつた。「こま物語」の絵になつてゐるのを手に取つて、

「じょうず上手にできた画えだこと」

と言いながら夫人は見ていた。小さい姫君が無邪気なふうで昼寝をしているのが昔の自分のような気がするのであつた。

「こんな子供どうしでも悪い関係がすぐにできるじゃありませんか。昔を言えば私などは模範にしてよいまれな物堅さだつた」

と源氏は夫人に言った。そのかわりにまれなことも好きであつ



たはずである。

「姫君の前でこうした男女関係の書かれた小説は読んで聞かせないようにするほうがいい。恋をし始めた娘などというものが、悪いわけではないが、世間にはこんなことがあるのだと、それを普通のことのように思ってしまったのが危険ですからね」

こんな周到な注意が実子の姫君には払われているのを、対の姫君が聞いたら恨むかもしれない。

「浅はかな、ある型を模倣したにすぎないような女は読んでいまして、もういやになります。空穂物語うつほの藤原ふじわらの君の姫君は重々しくて過失はしそうでない性格ですが、あまり真ま直すな線ばかりで、しまいまで女らしく書かれてないのが悪いと思うのですよ」

と夫人が言うど、

「現実の人でもそのとおりですよ。風変わりな一本調子で押し通して、いいかげんに転向することを知らない人はかわいそうだ。

見識のある親が熱心に育てた娘がただ子供らしいところにだけ大事がられた跡が見えて、そのほかは何もできないようなのを見ては、どんな教育をしたのかと親までも軽蔑けいべつされるのが気の毒ですよ。なんといつてもあの親が育てたらしいよいところがあると思われるような娘があれば親の名誉になるのです。作者の賞ほめちぎつてある女のすること、言うことの中に首肯されることのない小説はだめですよ。いったいつまらない人に自分の愛する人は賞めさせたくない」

などと言つて、源氏は姫君を完全な女性に仕上げることに一所懸命であつた。継母ままははが意地悪をする小説も多かつたから、その反対な継母のよさを見せつける気がして夫人はそんなものをいっさい省いて選択に選択をしたよいものだけを姫君のために写させたり絵に描かかせたりした。

中將を源氏は夫人の住居すまいへ接近させないようにしていたが、姫君の所へは出入りを許してあつた。自分が生きている間は異腹の兄弟でも同じであるが、死んでからのことを思うと早くから親しませておくほうが双方に愛情のできることであると思つて、姫君のほうの南側の座敷の御簾みすの中へ来ることを許したのであるが台盤いばんどころ所の女房たちの集まっているほうへはいることは許してな

いのである。源氏のためにただ二人だけの子であつたから兄妹を源氏は大事にしていた。中將は落ち着いた重々しいところのある性質であつたから、源氏は安心して姫君の介添え役をさせた。幼い雛遊ひなびの場にもよく出会うことがあつて、中將は恋人とともに遊んで暮らした年月をそんな時にはよく思い出されるので、妹のためにもよい相手役になりながらも時々はしおしおとした気持ちになつた。若い女性たちに恋の戯れを言いかけても、将来に希望をつながせるようなことは絶対にしなかつた。妻の一人にしたいと心の惹ひかれるような人も、しいて一時的の対象とみなして、それ以上関係を進行させることもなかつた。今でも緑の袖そでとはずかしめられた人との関係だけを尊重して、その人以外の人を妻に擬

して考えることは不可能であつた。許されようと熱心ぶりを見せれば伯父おじの大臣も夫婦にしてくれるであろうが、恨めしかつたころに、どんなことがあつても伯父が哀願するのでなければ結婚はすまいと思つたことが忘れなかつた。雲井くもいの雁かりの所へは情けをこめた手紙を常に送つていても、表面はあくまでも冷静な態度を保つていたのである。この態度をまた雲井の雁の兄弟たちは恨んでいた。

玉たま鬢かざらに右近中将は深く恋をして仲介役をするのは童女のみ  
るこだけであつたから、たよりなさにこの中将を味方に頼むので  
あつた。

「人のことではそう熱心になれない問題だから」

などと左中将は冷淡に言っていた。

内大臣は腹はらばら々に幾人もの子があつて、大人おとなになつたそれぞれ

の子息の人柄にしたがつて政権の行使が自由なこの人は皆適した地位につかせていた。女の子は少なくて后きさきの競争に負け失意の人

になつている女御によこと恋の過失をしてしまった雲井の雁だけなので

あつたから、大臣は残念がつっていた。この人は今も撫なでしこ子の歌を

母親が詠よんできた女の子を忘れなかつた。かつて人にも話したほ

どであるから、どうしたであろう、たよらない性格の母親のため

に、あのかわいかつた人を行方ゆくえ不明にさせてしまった、女という

ものは少しも目が放されないのである、親の不名誉を思わずに

卑しく零落をしながら自分の娘であると言っているのではなから

うか、それでもよいから出て来てほしいと大臣は恋しがっていた。  
息子<sup>むすこ</sup>たちにも、

「もしそういうことを言っている女があつたら、気をつけて聞いておいてくれ。放縦な恋愛もずいぶんしていた中で、その母である人はただ軽々しく相手にしていた女でもなく、ほんとうに愛していた人なのだが、何でもないことで悲観して、私に少ない女の子一人をどこにいるかもしれないとされてしまったのが残念でならない」

とよく話していた。中ほどには忘れていもしたのであるが、他人がすぐれたふうにならなかつたことで失望を感じることが多くなつても希望どおりにならなかつたことで失望を感じることが多くなつ

て、近ごろは急に別れた女の子を思うようになったのである。あの夢を見た時に、じょうず上手な夢占いをする男を呼んで解かせてみると、

「長い間忘れておいでになったお子さんで、人の子になっていらっしゃる方のお知らせをお受けになるというようなことはございませんか」

と言った。

「男は養子になるが、女というものはそう人に養われるものではないのだが、どういうことになっているのだろうか」

と、それからは時々内大臣はこのことを家庭で話題にした。







# 青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 中巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年11月30日改版初版発行

1994（平成6）年6月15日39版発行

※このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には2002（平成14）年1月15日44版を使用しました。

※「ただもう少し近くへ伺うことをお許しくだすったら、その機会に私の思い悩んでいる心を直接お洩《も》らしして、それによつてせめて慰みたいと思います。」の部分は、手紙の一部である

と判断し、他の箇所に合わせて一字下げとしました。

入力：上田英代

校正：砂場清隆

2003年7月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waazora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 源氏物語 蜃

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>